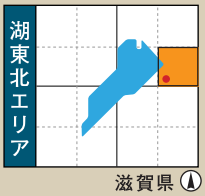
史跡
県指定

# 湖東焼窯場跡（ことうやきかまばあと）

彦根市古沢町　平成3年3月30日指定




**湖東焼は、幕末の彦根で焼かれた陶磁器で、当時の藩窯中並ぶもののない高度な磁器を生産していました。最盛期の湖東焼は、主に大名の観賞用か贈答用に用いられ、一期一会の茶湯で有名な井伊直弼（いいなおすけ）は湖東焼に力を入れ、自ら土をこね、茶器を焼いたと伝えられています。**

| 当時のできごと | |
|---|---|
| 1829年 | シーボルトが帰国する |
| 1842年 | アヘン戦争が終わり南京条約が結ばれる |
| 1860年 | 桜田門外の変により伊井直弼倒れる |

## 概説

湖東焼は文政12年（1829）、城下の商人絹屋半兵衛が伊万里の職人を伴い、芹川左岸の晒山に築窯したのが始まりですが、間もなく佐和山城本丸跡の西麓、餅木谷に移築されます。半兵衛を中心とした共同経営で営業をしていましたが、天保2年（1831）からは、半兵衛の単独経営となり、瀬戸からも職人を招き良品を生産します。しかし、伊万里と瀬戸が独占していた陶磁器の流通体制の中に食い込むことができず、経営が悪化し、彦根藩の助力を度々仰ぐようになり、徐々に藩の中に組み込まれていきます。

天保13年（1842）、美術品の愛好家であった12代藩主井伊直亮の時に、ついに藩直営の窯となり、九谷や京からも職人を招き、製品の高級化が図られました。さらに13代井伊直弼の代に黄金期を迎え、湖東焼が目指していた高級品生産が定着し、製品の銘も「湖東」に統一されます。桜田門外の変により直弼が倒れた後は生産が衰退し、明治28年に廃業されます。



湖東焼窯場跡遠景



明治期の窯の遺構

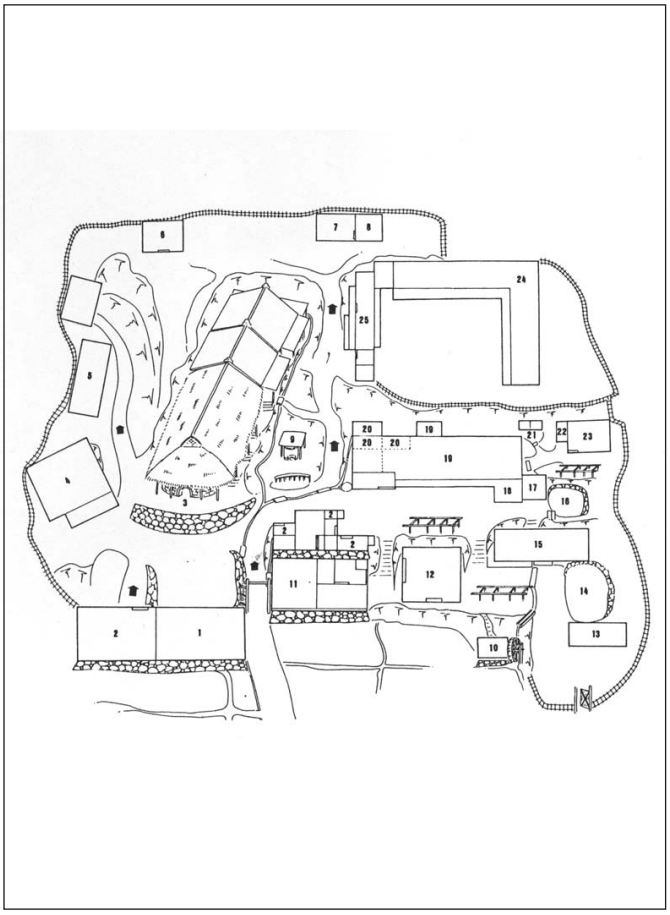


湖東焼

# 遺構について

平成5年度と6年度に行った調査の結果、窯場の中心施設ともいえる長さ約30m、幅約5m、焼成部が6房ある連房式登窯（れんぼうしきのぼりがま）の遺構が確認されています。一つの房の規模は、幅約4.5mで奥行約5m、床面は2～3段になっていて、少なくとも2回は改修されていたと推定されます。分焔柱の列の耐火レンガは高熱でボロボロになり、床面も熱により真赤に焼けていました。また、窯場の拡張に伴い形成されたと見られる、未製品・窯道具・耐火レンガなどで埋め立てられた整地層が確認されています。

これらの遺構は湖東焼が廃止される直前の窯跡と考えられます。現段階では、江戸時代の窯の遺構は確認されていません。



安政2年（1855）の窯場



散乱する窯道具



散乱する陶片

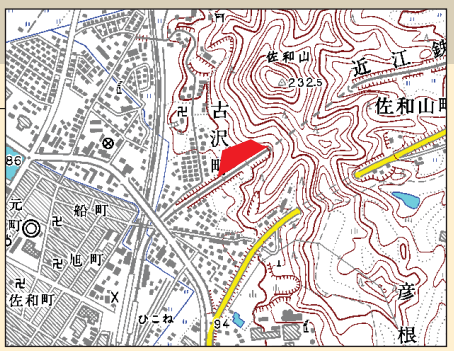
## 関連する文化財

| | |
|---|---|
| 金山遺跡（信楽町） | 中井出窯とほぼ同時期の窯跡。3基の窯が発掘された |
| 中井出古窯跡（信楽町） | 学習シートNo.049 |

## もっと深く知りたい

彦根城博物館　☎0749-22-6100　彦根市金亀町1-1

湖東焼窯場跡へのアクセス　JR琵琶湖線　彦根駅下車
名神高速道路　彦根インター




【参考文献】〔湖東焼窯跡測量調査報告書〕彦根城博物館

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月